

中 北 海 道

現代俳句協会

会 報

85号

平成31年
4月5日発行

ある大会で、AI俳句を自分が選んだりしないかを危惧するという大先輩のご挨拶がありました。会場内にどよめきがはしった。私もそう思う。

人工知能はどこへゆく



亀松 澄江

新聞にAIの記事が載らぬ日が無いような昨今。

一月一日の日経新聞第二部見出しにも「人工知能（AI）が暮らしてから経済まで様々な場面で活用されるようになってきた」とあった。家事、農業、建設、医療など危険や人手不足等の解消に重要不可欠なことであろうが、AIスピーカーから家族同士の会話が意図せずして外部に送られるような、ゾツとするケースがあるのも事実なのである。

このままでいくと人間の俳句がAI俳句に越される日がくるのもそう遠くはないのかもしれない。

科学の進歩はどこまで必要なのだろう。どこへゆくのだろう。

水を汚さず

森を壊さず

土を汚さず

科学の進歩より、縄文に学び便利さよりも地球に人間に優しい生き方を選びたい。

自然と調和した生き方をしながらこれからの子供たちに、きれいな海や山を残したいと切に願っている。

そして明日もまた、苦しんで悩んで自分の頭と心で俳句を作っていきたいと思う。

ざわめきもセーターも畳み星の夜

澄江

平成三一年度

総会及び新年交流会の記

中 田 琢 志

H31・2・2
於 すみれホテル

朝まで続いた吹雪がおさまり、晴れ間も広がる中、三四名が出席して総会が開かれた。

まず、ふじもりよしと事務局長の司会で、過去一年の物故者への黙祷が行われた。五十嵐秀彦会長から、昨年度の会費値上げ後も、会議費の支出増で厳しい運営が続いており、入会者を増やすためには、新しく俳句愛好者を増やす方法を考える必要がある、との挨拶があった。続いて議長に田湯岬氏が指名され、議事に入った。平成三〇年度事業・決算報告、平成三一年度の予算と事業計画等がそれぞれ報告された後、承認された。その他の議案として、林冬美氏から、北海道現代俳句大会への参加の呼びかけと、今大会より大会出席者から資料等の経費を含めて大会費として千円頂戴することとした旨、了承された。

総会終了後、鹿岡真知子氏の司会で、新年交流会に入った。会長からここ三年間、道内在住者が各種俳句賞を受賞しているという挨拶があり、昨年北海道新聞俳句賞を受賞した浅井通江氏に音無早矢氏から、現代俳句協会全国大会読売新聞京都総局長賞を受賞した亀松澄江副会長に村上海斗氏から、北海道俳句協会賞を受賞した石川美智子氏には、鹿岡真知子氏から、それぞれ花束が贈呈された。辻協前会長の乾杯で開宴となった懇親会ではお酒も進んで、各テーブルで和やかな歓談が行われた。最後に臼井千百氏によって、若い人の活躍の期待と会員の健康を祈念しての閉会の乾杯が行われた。



2019年度中北海道現代俳句協会 事業計画

日 程	事 業 計 画	
1 月 26 日 (土)	第19回中北海道俳句賞選考委員会 13時 かでる 2・7 会議室	組 織 活 動 部 顕 彰 係
2 月 2 日 (土)	平成31年度定期総会及び新年交流会 14時 すみれホテル 札幌市中央区北1西2	事 務 局
6 月 16 日 (日)	第28回北海道現代俳句大会(主管:中北海道現代俳句協会) 13時 札幌サンプラザ 札幌市北区北24西5 大会費 1,000円 講演 宇多喜代子現代俳句協会特別顧問 演題 「くらしと言葉」 出句締切 2月27日(水)	事 業 部
8 月 31 日 (土)	俳句研究交流句会 会場:かでる 2・7 520号室 当番結社:氷原帯	組 織 活 動 部
8 月 上 旬	第20回中北海道現代俳句賞の募集 締切 12月15日	組 織 活 動 部 顕 彰 係
そ の 他	会報 4月 85号・8月 86号・12月 87号 「一人一句集」発行、住所録作成 幹事会 年6回実施予定 顧問・三役・中北海道現代俳句賞選者の会 年1回実施予定	広 報 部 事 務 局

※ 8月送付予定の住所録に電話番号、住所等の掲載を希望されない方は事務局まで御連絡下さい。

現在の幹事構成

会 長	五十嵐 秀彦								
副 会 長	石本 雪鬼								
	亀松 澄江		(事業部兼務)						
事務局 長	ふじもりよしと		(広報部兼務)						
監 査 員	平尾 知子	齋藤 雅美							
顧 問	藤谷 和子	辻脇 系一							
参 与	横山 いさを								
幹 事	高 畠 葉子								
会 計 部	中 田 琢志								
総 務 部	林 冬美	遠藤 静江							
事 業 部	金子 真理子								
組 織 活 動 部	原 田 昌克	瀬戸 優理子		(顕彰)					
	鹿岡 真知子	近藤 由香子							
広 報 部	江 草 一美	青山 酔鳴							

中北海道現代俳句賞選者

五十嵐 秀彦
鈴木 きみえ
辻脇 系一
永野 照子
横山 いさを
渡辺 のり子
石川 美智子

会費納入の御願い

本年度も会員の皆様全員、振り込みにて納入して頂くことになりました。振込手数料も御負担下さいますようお願い申し上げます。

第19回中北海道現代俳句賞受賞作品



受賞者 鹿岡真知子氏 プロフィール

1950年 厚岸生れ、現在札幌市在住
1993年 そごうデパート 新妻博教室入会
2006年 NHK カルチャー新妻博 辻協系一教室入会
2007年 同人誌「粒」(山田緑光代表2010年終刊)入会
2013年 「水原帯」(山陰進主宰)入会
2016年 水原帯新人賞受賞
2018年 水原帯賞受賞
「水原帯」企画同人・現代俳句協会会員
中北海道現代俳句協会幹事

陽の溜り

手術後の傷口傷跡風花に
術後検診付添いに桃の花
血を採ります桜だんだん膨らんで
造影剤の流れゆっくり桜咲く
切り取った腸おもう春の月
からだじゅう骨という骨梅ひらく
にんげんをじっと見ているふきのとう
ブラインド上げればさくら一周忌
正坐する足の痺れに梅の花
川の辺をゆっくり猫が猫柳
菜の花に水平思考あした晴れ
日曜日さくらの翳が歩きだす
うから春ひとひとひの凸と凹
耳環指環全部外して春の月
少年に戻る桜のトンネルは

鹿岡真知子

うつむいた時間に止まる白い蝶
緑陰は日毎にやさし深海魚
少年のまなこ白桃色付いて
さよなら三角金木犀の花のまえ
眼裏の花火を葬り終電車
雑草に力いっぱい敗戦忌
少年の八月があるキリンの眼
昼寝覚ひとの容を整えて
ぼうたんの白を壊せば旅立てる
僧が行くぼうたんの彩深くして
ひまわりに遠い日の海見えている
バス停で最後に降りた立葵
夕焼を容れてシャツター降りる音
肉塊の窪み秋思がふえていて
両腕に秋桜という陽の溜り

【平成30年度 第19回中北海道現代俳句賞一次選考結果】

番 号	②	④	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑬	⑬	⑬	⑬	⑬	⑬	⑬
	陽の溜り	寒林	観覧車	平成の終り	遣伝子の行方	新樹光	風鈴	電話魔	象の皺	エクレアと干物	ホットチョコレート	鶴一羽	乾いた土	
辻脇系一	○		○		○									
五風秀										○	○	○		
鈴木み	○			○				○						
永野照		○	○						○					
横山い						○			○		○			
渡辺の	○						○							○
石川美	○	○					○							
一次推	4	2	2	1	1	1	2	1	2	1	2	1	1	1

選考経緯

選考委員長 横山いさを

第一九回中北海道現代俳句賞への応募作品は二七篇を数えた。その内、初挑戦は九名、三回以下が一八名と七割ほどを占め、新しい顔ぶれの増えていることが目立っている。

一次選考は、前以って書面により各委員が順位を付けずに三編を選ぶという形を取った。その内容は別表のとおり。

これに基づき、二次選考は一月二六日、かでのる2・7に於いて行われた。まず各委員が選考した作品を推薦する根拠を説明した。別表のように、二人以上の委員が推す作品が、②「陽の溜り」④「寒林」⑥「観覧車」⑪「風鈴」⑬「象の皺」⑲「ホットチョコレート」の六編あり、いずれも選考対象として残すこととし、この六編のうち、各委員が一、二、三位と順位を付けて選んだ結果、四人の委員に選ばれている②番の「陽の溜り」を推すという事で、七人の委員が納得し、決選投票を行うまでもないという事で決定した。二位になつてゐる⑲の「ホットチョコレート」は、重い題材と日

常詠との均衡も取れているものの、はっきり推せないという声もあり、七人の委員に依る選考という形態からはみ出ってしまったのが惜しまれる。

なお、応募作品三〇句の内容に關しては、既定上、内部の句会などに出していても問題はないが、どこかで目にしてゐるという句に戸惑うこともあり、新作の内容をもう一度見直してみることも必要かもしれない。

作品の応募回数という点では、七割近くの方が三回目以内というように新顔がふえている中で、一三回目にして賞を射止めた受賞者の飽くなき挑戦に敬意を表したい。

重い読後感 横山いさを

⑲「ホットチョコレート」

高畠 葉子

ガス室の覗窓にも射す冬日
アウシユピッツ博物館カフェにホ
ットチョコレート
存分に嘔し我らには平和

重い句材が浮き上がることもな
く脳裏を駆け巡り、胸を熱くする。

望郷と西瓜の種を遠く吐き出す
こんこんと星のむ遊び大停電

一転、日常詠にもリアルな目が働く。重さ軽さの均衡の妙に惹かれる。

⑬ 「象の皺」 亀松 澄江

海明ける母になる日の握り飯
八十八夜鯨きれいな骨となる
七月の雨象の皺ふえて

情景がすんなりと胸に落ちると言った読後感に惹かれる。それだけに「十六夜やまだ聞こえたる瞽女の歌」に違和感を覚える。

⑭ 「新樹光」 林 冬美

開墾に暮れし肉体昼寝覚
遠郭公土間の奥から子守歌
開拓といふ手仕事や粟を蒔く

身辺の誰彼から聞いている開拓の苦勞という段階のもどかしさも。

⑮ 「陽の溜り」 鹿岡真知子

少年のまなこ白桃色付いて
昼寝覚人の容を整えて

などには感銘を受けた。それだけに「葉の花に水平思考あした晴れ」などは安易。

「だんだん」「ゆっくり」「じつ」となど副詞の多用もあるけれど、

粘り強い挑戦に敬意を表します。よかった。

中北海道現代俳句賞 選考に当たって

辻脇 系一

第一九回の応募作品は二七編。この賞も紆余曲折を経て今の形（過去一年の作品・発表未発表を含む）となつて、当初の企画にかかわった一人として感無量のものがある。会員数から見ても十分な意義と理解を戴いていると受け止めている。

今後は、会員外にも開いて行く働きかけを含めて、改めてそれぞれの自己確認の場となつてもらえれば嬉しい限りである。

一次選考は三編順位無しで、次の作品を選んだ。②の「陽の溜り」では「昼寝覚ひとの容を整えて」「両腕に秋桜という陽の溜り」など、全体としては心情にもたれる所もあつたが共感した句が多かつたこと、⑥の「観覧車」は、「養花天二胡とまどろむ二胡奏者」「雲梯の四角い空や沖繩忌」など、素材を客体化、自分のものにしよ

うと試みているあり様が何えた句に好感。⑧番の「遺伝子の行方」では、「衛星と干大根の夜なりけり」などに惹かれた。一部に「穴出でて蟬の晩年始まりぬ」などの幾分の観念の処理に不安を残したものの、試みの方向には捨て難いものをおかんでいる。

選考会では一次で推された作品について意見を交わし、投票の結果は「陽の溜り」の鹿岡真知子氏が多数を得ることとなつた。長い挑戦と自戒の結果である。改めてお祝い申し上げたい。

今回の選考に当たっては、対象とはならなかつたが次のような作品にも出会つた。

「たんぼの根のゆきどまり旧駅舎」藤谷和子、「十一月やさしい言葉から枯れる」原田昌克、「ノック二回から広がってゆく枯野」江草一美など、それぞれ特徴のある句も多く読ませていただいた。また次回多くの方々との作品との出会いを楽しみにしたい。

新しい感覚の登場も

五十嵐秀彦

今年是一次選考でかなり点が散つ

た。最終的には全員一致で鹿岡真知子さんの「陽の溜り」に決定。経緯は座長の横山いさをさんの「選考経過」をお読みいただきたい。

受賞作「陽の溜り」の鹿岡真知子さんは一三回目の応募で掴んだ栄冠。「切り取った腸おもう春の月」「からだだじゆう骨という骨梅ひらく」などの句では、生々しい体験を詩に昇華させることに成功している。「バス停で最後に降りた立葵」「両腕に秋桜という陽の溜り」など共鳴句が多い三〇句であった。肉体感覚の中に非凡な着想を得ている読み応えある作品。受賞にふさわしいと言えるだろう。

受賞作以外では一次選考で私が選んだ三篇が、これまでになかった新しさ、独自のテーマ設定、言葉の大胆な冒険を見せてくれた。福井たんぼはの「エクレアと干物」は、「妻らしく座るソファアのずわい蟹」「予熱したオーブンで焼く古日記」「星飛んで息がでないいほど近い」など、一見不条理な言葉を紡ぎ、意味性をはぎ取り、ぎりぎりのところで詩にしようという挑戦に感服した。

青山酔鳴の「鶴一羽」は、「方言のやうに日焼のままである」「寒林やバス停は文字から錆びる」

「勇魚啼き民族ごとの星座の名」など、定型感をしっかりと持ちながらそこに個性を発揮。やや句にムラがあったのが惜しい。

高畠葉子の「ホットチョコレート」は前半のアウシユビツ連作一〇句がみごとだった。ナチによるユダヤ人虐殺の現場に立ち、怒りや悲しみとは少し違う印象を持った異邦人の自分。その戸惑いに着目した句「手袋のまま異国語のボンボン」「存分に噓し我らには平和」などに、表面的な反戦平和だけでは片づかぬ感情表現が見て取れる。決選投票で第二位と善戦した。次回に期待したい。

今回は応募作も多く、レベルの高い作品が揃っていた。応募者全員に敬意を表したい。

もつと冒険を

鈴木きみえ

応募作品二七編、昨年度よりふえた事に注目した。本年度は佳句が多く選ぶのが大変であった。

② 「陽の溜り」 鹿岡真知子

造影剤の流れゆっくり桜咲く
耳環指環全部外して春の月
緑陰は日毎にやさし深海魚
さよなら三角金木犀の花のまえ
バス停で最後に降りた立葵

最初は男性の句かなと思つたが、読み進んで行くうちに女性の連で驚いた。病中病後の作品に深刻さが伝わってくる。荒けずりの句も目についたが、一三回の挑戦で見事にこの賞に輝いた。心よりお祝いを申し上げ、ますますのご健康とご活躍をお祈りする。

⑬ 「電話魔」 福田 元子

ゆつくりと右脳のめざめ青葉木菟
夜の秋解けぬ難字のクロスワード
文机の他は灯を消し末枯れ虫
配膳車走る紅葉は降りしきる
電話魔と小春日和を使ひきる

さらりと流しているが、着眼のよさ、日常の生活に密着した最後の句など女性には珍しく俳味が底を流れている。しかし何かスパイスが足りない。この辺りが課題だらう。

⑦ 「平成の終り」 檜垣 桂子

二丁目眼科二丁目秋薊

夜が来る秋明菊のうしろより

残りゆくものに子規忌と星空と

セーターを被りすつぽり他人めく

詩情豊かな一連であるが、推敲不足の句も散見された。実力のある作者なので前向きに再度の冒険をして欲しい。

②② 「ホットトチョコレート」

高島 葉子

手袋のまま異国語の祈り真似

④ 「寒 林」

古川かず江

⑥ 「観覧車」

大河原倫子

雲梯の四角い空や沖縄忌
右の三人も印象深かった。来年度も更なる挑戦を期待している。

選考寸感

永野 照子

二七編の中から②④⑥⑩⑫⑭⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿を
選びさらに共鳴句の多かった④⑥
⑩の三編を選出した。

古川かず江さんの作品④「寒林」は〈峽に住む橋の高さに花胡桃〉〈切抜き裏に喪の記事秋深む〉などの丁寧な実の描写の強さに引かれた。一方で一句の素材の選択に難しさもあって考えさせられる事も多かった。

大河原倫子さん⑥「観覧車」は〈みんないい〉など既視感のある言葉や作句のパターン化などが気になったが〈あすのけふけふのきのふの花筏〉生きて在ることの哀しみや〈東京の空と知恵子の蝶の空〉の命の輝きを表現しようとする作品などに自分らしい作品を書くこうとする姿勢を感じた。

亀松澄江さん⑩の「象の皺」のすでに評価されている〈八十八夜鯨きれいな骨となる〉や〈原子力空母入港南瓜に刃〉などに大きな力を見たがそれらを支える地の作品にもう少し推敲を深めてほしいと思う作品があった。

他に福井たんぽぽさん⑳の〈星飛んで息がでないほど近い〉など一連の作品は言いたいことを俳句に言わせるのではなく、俳句に乗せるというしなやかさに感心した。青山醉鳴さん㉑の〈牡蠣殻の中のジュラ期を呑み干せり〉なども注目。

受賞作②「陽の溜り」鹿岡真知子さんの作品は、当初から念頭に置いていた。〈血を採りますだんだん桜膨らんで〉の実を述べながらどこか虚へと繋がっていく身体感覚、〈少年のまなこ白桃色付いて〉の清潔なみずみずしいエロチシズムなどに魅力があった。一三回日の挑戦の努力を讃え、今後一層の御健吟をお祈りいたします。心からおめでとございます。

個人的体験から一般化へ

渡辺のり子

今回は応募作品の中に、新しい俳句の試みが多々見られて興味深く選考させて頂いた。ただ、その試みに俳句としての一般性が乏しい部分もあったかもしれない。しかし、今後がとても楽しみである。

② 「陽の溜り」 鹿岡真知子

からだじゅう骨という骨梅ひらく
肉塊の窪み秋思がふえていて
両腕に秋桜という陽の溜り

手術という個人的な体験に、季語の持つ重みと詩的な言葉の組み合わせによって、見事に一般性を

持たせている。「両腕に」抱いたさびしい秋桜が陽溜まりのように仄温かい。ポエムとしての美しさと体験の一般化が具現されており、受賞作品にふさわしい。

⑪ 「風鈴」

岡本 順子

この亀が鳴くかもしれぬ近未来
きつちりと山折り谷折りの春愁
カーテンを開く立冬見るために

亀は人間より長生きして、未来の世界を見ることが出来るかも知れない。亀が「泣かない」世界であればいいが。

⑫ 「渴いた土」

栗山 麻衣

頬被海の暗さを目に宿す
隙間とは隙間風など吹くところ
桃と言ふ唇二回つけて言ふ

「桃・・」と言っただけで、甘
い滴りが唇を濡らすようだ。



選考を終えて

石川美智子

先ず応募作品二七編に圧倒。予選では②④⑪⑬⑯⑳の六篇を、一次選考では②④⑪を選考した。優先順位から選評したい。

② 「陽の溜り」

鹿岡真知子

ブランド上げればさくら一周忌
昼寝覚ひとの容を整えて
ほうたんの白を壊せば旅立てる

句群に流れる明るさと強さに瞳目。作者の本位から離れたとしても表白された俳句が訴えている。日常への眼差しの深さに感銘。

④ 「寒林」

古川かず江

蔓を編むだんだん春愁のかたち
蛤のこぼりと誰かが笑った
切抜きの裏に喪の記事秋深む

「蛤」の句の抜け感に共鳴。「切抜きの」など日常茶飯の中の驚きや発見を詩形にしていくな作者の瑞々しい感性に好感をもった。

⑪ 「風鈴」

岡本 順子

きつちりと山折り谷折り春愁
啓蟄や登場人物みな怪し
小説を書いたのだからか冬銀河

言葉の幹旋がうまい。作為的といえはそれまでだが納得させるだけの俳句の力がある。それだけに課題は抑制力だろうか。次の作品にも注目した。

⑱ 「木が一本」

原田 昌克

改行の冒頭から時雨

詠みたいように詠む・この頑固な姿勢が愉快。作者は遠い所で懐手をしているのだろうか。

⑰ 「象の皺」

亀松 澄江

原子力空母入港南瓜に刃

取合せの妙に魅かれる。自己分析が巧み。

⑳ 「地球賛歌」

藤森そにあ

弟の忌目の匂い霜柱

遊び心と真面目さの格差。魅力であり欠点。

鹿岡真知子氏の受賞を心よりお祝い申し上げたい。

礎

新妻 博

略歴

T6～H24 札幌生まれ。現代俳句協会々員・日本現代詩人会々員・北海道詩人協会々長。句集「遠い日」他 詩集等多数の著作有り。札幌市民芸術賞受賞。

拜啓落し文などのベジタリアン (創生)

冷泉家古文書一束百舌黙る (融・YU)

リヤ王の具足の蜂がとんでくる (融・YU)

尾白鷺あたまのちから抜いてをり (武者龍膽)

榆の花こぼれる国立大学の肉量 (立棺都市)

金井衆三氏 抄出

「青のフロント」佳句抜粋

区間新で襷受けとる二月かな

石井 美髯
コンビニの明かり吹雪に浮いている

音無 早矢
衛星の死角おおかみ生き残る

瀬戸優理子
丹頂の孤愁の声の昏れ残る

高橋あや子
ラーメンは普通毒舌のウサギ

村上 海斗

幹 事 会 報 告

H30.11.15 (木) 18時 かでの2・7 810A 室
議題

- 1 俳句研究交流句会結果報告 (組織活動部)
 - ・会場の変更・進行の方法次回再考の点あり
 - 2 2019年度総会・新年交流会について (事務局)
 - ・日時 H31.2.2 (土) 14時
 - ・会場 すみれホテル 会費 5,000円
 - ・案内状の作成 総会資料の作成等
 - 3 2019年度北海道現代俳句大会について (事業部)
 - ・日時 2019年6月16日 (日)
 - ・会場 札幌サンプラザ
 - ・講演 宇多喜代子氏 演題未定
 - 4 中北海道現代俳句賞 (組織活動部)
 - ・応募状況 現在 2篇
 - ・締切 12月15日 選考委員会 H31年1月26日
 - 5 三役・顧問・選者の会 (事務局)
 - ・11月4日開催、中現俳賞選者、臼井千百さん退任により石川美智子さん就任。
 - 6 会報 84号 (広報部)
 - ・12月上旬発行予定
 - ・俳句賞の応募用紙再度同封
 - 7 その他
 - ・本部から、新会員加入時の特典、震災被災者への救済 (年会費減免など)
- 出席者 (五十嵐・石本・亀松・江草・原田・林・高島・青山・瀬戸・ふじもり・金子・中田・近藤以上14名)

H31.1.17 (木) 18時 かでの2・7 503号室
議題

- 1 年度総会・新年交流会について (事務局)
 - ・H31.2.2(土)14時 すみれホテル 会費5,000円
 - ・総会資料の確認 当日の役割分担
 - ・幹事集合13時 受付開始13時30分
 - 2 中北海道現代俳句賞 (組織活動部)
 - ・応募総数 27篇
 - ・選考委員会 1/26(土)9:30 会場かでの2・7 910号
 - ・選考委員 五十嵐・鈴木・辻脇・永野・横山・渡辺・石川
 - 3 「一人一句集」2019年度 (広報部)
 - ・原稿作成 ふじもり・青山 会報85号に同封
 - ・校正 江草・青山・ふじもり
 - ・印刷 4月上旬 かでの8Fにて作業
 - 4 会報 85号 (広報部)
 - ・4月上旬発行予定
 - ・巻頭言 亀松、総会・新年会記録 中田
 - ・発送用封筒 1,000枚発注
 - ・印刷会社の印刷機変更について
 - 5 第28回北海道現代俳句大会 (事業部)
 - ・2019年6月16日 (日) 13時 札幌サンプラザ
 - ・大会費 1,000円 (資料代等今回より設定)
 - ・講演 宇多喜代子氏 演題「くらしと言葉」
 - ・懇親会々費 5,000円
 - ・投句締切 2月27日 (水)
 - 6 その他
 - ・ゼロ句会の推進
 - ・本部からの連絡事項、会員育成費申請について
- 出席者 (五十嵐・石本・亀松・江草・林・鹿岡・遠藤・高島・青山・瀬戸・ふじもり・金子・中田・近藤 以上14名)

